

# 辰鈴木商店の思い出 (1)

大里時代 中村元義

私は明治三十三年生れ当年七十八才、鈴木商店へは大正三年の春、所謂ぼんさんとして採用せられ、昭和二年お店閉鎖迄凡そ十三年間御世話になり、多くの先輩上長の方々の御指導御庇護によりどうやら一人前の人間となり、同僚後輩も澤山出来ました。今頃思い出話、感謝の気持ちなど手後れも甚だしい次第であります。生来無能と申そうか唯細々と生き延びる事丈で精一杯、御厚誼を頂いた方々にも何の御報恩もなし得ず申譯なく存じます。依って十三年間を四つの勤務地に大別し、夫々の思い出を心に浮かべながら、御世話になった方々に御禮の心持ちを主とし、それに兼ねて老来や、もすると薄れゆく当時を再び想起して、精神上の若返りに資したい気持ちで本文を書かせて戴きます。

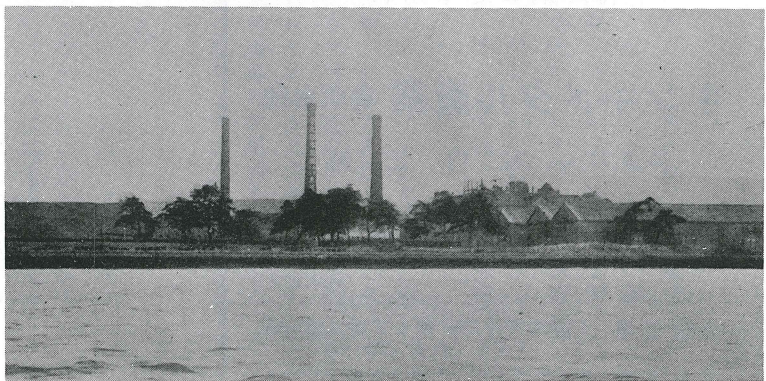
大正三年春、神戸市栄町二丁目の辰の門をくぐり、約一週間仕事も決まらずぼんやりして居りましたが、其の内門司市外大里町の酒精工場勤務と決まり、同僚一人(多分高知出身の入交君)と汽笛一声三宮駅を出発しました。生れて始めての汽車旅行、小学校の讀本にあつた須磨舞子明石も一瞬の内、よく眠る同僚とあまり話も出来ず、翌日午後下関支店へ参り、西岡支店長に御挨拶の後、私支店員に案内され関門連絡船にて門司に渡り、更に今日の西鉄で大里の一つ手前小森江で下車しました。沿線右側の海岸には大小の工場が並んで一番大きいのが大里製粉所、次に私の行く大里酒精工場、其辺に接近して精米工場、製塩工場少し、西に大日本製糖(鈴木とは別会社でしたが非常

に関係深い)更に西に桜ビール本社及工場、又附属製塩工場などです。

夫々の工場は扱置き私は酒精工場へ連れて行かれた。正門には合名会社鈴木商店大里酒精工場と肉太で且つ達筆で書いてあり、入ると直ぐ事務所、ここで私人生最初の勤めが始まる譯ですが、工場全体に比べ事務所は粗末な感じ、木造瓦葺二階建一階のみ事務所、ここで皆様の御名前を御披露しますと、先づ中央に工場長佐藤保吉様右奥に支配人戸坂隆吉様、向い合つて石山太郎氏(税務係)戸坂様横日高和一郎氏、向い合つて四宮田幾藏様(担当現場事務一切)大要以上の通りですが、更に工場本館に近着くと工務室分析室があり木幡健五郎様(技師長)以下五六人程でありました。

此の辺から工場本館へ入りますが、私などは普通関係なし、只入口に巨大な煙突が周辺を威圧する如く突立っていました。そこを左折しますとトロッコのレールが敷いてあり、その終点は木造の棧橋に出て原料の切干芋など四国九州から帆船で持込まれ陸揚げされていました。

扱て事務所工場全体の概観を述べましたが、私は何んな仕事から出発したか、先づ朝七時頃二階から降りて参り、事務所の床を掃除机上の雑巾掛け其他、皆さんの御出席が揃ったら先づ御茶を出すこと、電話がなると直ぐ取り次ぐ、又下関支店から



大里工場 (昭和9年3月5日下関要塞司令部認可撮影)



大日本製糖大里工場築港船留

製粉の岸へ直航のランチで酒精宛書類や小荷物などが届いたら取りに行く、反対に工場より支店へ届ける場合もあり、そんな事から始まり月日の経つにつれ特に忙しい四宮田様の御仕事を弗々教わりながら御手傳いをさせてもらいました。焼酎の見本を下関大阪北海道などの支店へ発送する。下関は販売の元締めであり幾人かの販売係から電話で出荷指図を連絡して来る(後に私と同年で同郷の内田蒼三郎君が主として担当)それを工場現場宛の積出指図に切り換へ出荷さす、原料切干芋の舟が棧橋へ着くと専属人夫に陸揚倉入させ、其の際着貫をする、その立會もしました。二年目頃から対外的な簡単な文書など書かしてもらい、又時には間違つた書類や伝票を作り四宮田様に御手数御推察申して居ります。

御迷惑をかけ今でも申訳なく思つて居ります。製造工程や技術以外の総ての事は戸坂様の監督下にあり私共の事も何かと御配慮賜りし事と御推察申して居ります。

扱て歐洲大戦は急に戦局が拡大し日本も併合国の一員として英米仏へ各種の食料品、戦時緊急品の製造輸送を迫られ、大里の各工場は昼夜兼行であつた事御承知の通り、そんな事が原因ではなかつたか、或日目前の製粉工場が火災を起し六階のコンクリート建て工場本館から原料製品の燃える猛炎が噴出する物凄い様相、其の時酒精工場から戸坂支配人が軍装に着替えられ駆け出して行かれた其時の状

況は私の眼底にまざまざと残つて居ります。

従つて人事の交流充足が烈しくなり酒精工場では先づ日高氏が台湾へ転じ、伊達信雄氏が来任後伊達氏が宇和島へ転任、後に田中真一氏(同氏は後に脚氣で入院せられ)次に田中寅次郎氏、其の次に堀口氏、更に氏名失念一人、私の相棒に大溝茂雄君、今西憲一君が増員せられ、酒精工場の山手に各工場共用の独身寮が建てられ、最初に四宮田様、田中真一氏、田中寅次郎氏私など一諸に移りました。それ迄事務所二階では小僧ツ子は私一人で淋しく感じていましたが、漸やく交友関係が多くなり大里の土地にも落着きを感じたが其後何ヶ月かの後に私は神戸本店への転任を命ぜられました。

当時歐洲大戦の変動は私などには良い意味での波紋を感じられ、三年の間の各社合同慰安旅行は豪華そのもの、後に九州を去つて行く私には又と得難い貴重なる思い出でありましたが、ここでは略記します。「熊本の球磨川下り、水前寺公園、別府温泉、耶馬溪、安芸の宮島、金比羅参り、高松栗林公園」等です。

借て汲めども盡きぬ思い出の数々、その大里の三年にお別れの時となりましたが、只一つ忘れられぬ悲しい出来事、それは宇和島の焼酎会社を鈴木が買収合併し其の基礎造りに戸坂様、伊達氏が転勤、それに前後して出張された佐藤工場長がたしか腹膜炎で急死なされた事でありました。大里の事務所で工場長の直ぐ横に私の机が置かれてあり、毎日気の利かない私をお叱りなさらず常に変わらず温顔の工場長の面影を忘れる事は出来ません。末筆ながら茲に謹んで御冥福をお祈り申上げます。幸松様、四宮田様に延命寺で送別の晚餐を頂き嬉しい大里の最後となりました。第二の故郷さよなら。